5TH ANNIVERSARY

山梨県の地場産業である宝飾産業の歴史は、かつて山梨で上質の水晶が採掘されたころまで遡ります。江戸時代には京都から水晶の加工技術が伝えられ、やがて水晶彫刻と宝石研磨の技術へと発展しました。明治期になると、錺（かざり）職人の金属加工技術が加わり、装身具＝ジュエリーが制作されるようになりました。

機械化が進む現在でも、山梨では伝統を受け継いだ職人たちが、卓越した技術により手作業で多くの作品を作り続けています。

また、山梨の宝飾産業のさらなる発展のために、伝統的な技術を活かしながら、新しい“山梨ジュエリー”を生み出す挑戦的な取り組みも行われています。

そのようなジュエリー産地“やまなし”ならではの多彩なジュエリーや、貴金属加工・宝石研磨・水晶美術彫刻の職人たちの熟練の技を皆様にご紹介する施設として、山梨県立宝石美術専門学校附属山梨ジュエリーミュージアムは2013年9月28日に開館し、今年で5年を迎えることができました。

これからも“山梨ジュエリー”の魅力を発信し、より一層皆様に楽しんでいただける施設を目指して活動してまいりますので、変わらぬご愛顧をよろしくお願いいたします。

9月29日30日に記念イベントを開催し、多くの皆様にご来館いただきました。（左から、宝石すくい、館蔵品試着体験、ジュエリー制作体験）

山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1−6−1　山梨県防災新館1階
http://www.pref.yamanashi.jp/yjm/
開館時間：10:00〜17:30（最終入館17:00）
休　館　日：火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、
その他、臨時に開館・休館することがあります。
入　館　料：無　料
駐　車　場：92台　山梨県防災新館地下有料駐車場（来館者は1時間無料）

山梨ジュエリーミュージアム発行

craftsman jewelry

Vol.16
2018年12月発行

craftsman jewelry file.16
5th anniversary
2018 December

Tomohiko Ohyori

大寄　智彦

甲州水晶貴石細工伝統工芸士
宝石加工・ジュエリーマスター（山梨県認定）
山梨県立宝石美術専門学校非常勤講師

貴石彫刻オオヨリ
山梨県甲府市丸の内３丁目25－１
Tel：055-224-3762

TO LABO –shop & studio–
山梨県甲府市丸の内１－14－14－104
Tel：055-232-1456

Rock Crystal
Rock Crystal

Koo-fu Silver925・水晶・オニキス
27W×27D×12H（mm）

上が水晶、下がオニキスのドームの中にシルバーで作った薔薇を閉じ込めたチョーカー。Koo-fuコレクション2011作品。

SAKURA Ring
SAKURA Ring

Koo-fu Pt950・アメジスト・ダイヤモンド
19W×17D×33H（mm）

2008年から2011年まで参加したKoo-fuプロジェクトにおいて、伝統的な彫刻技術を用いて水晶のドームの中にモチーフを閉じ込めて、新しい魅力を表現するオリジナル作品を、制作だけでなくデザインも自身で手掛けた。SAKURAはアメジストでかたち作った桜の花の中にダイヤモンドのおしべとめしべを閉じ込めたリング。Koo-fuコレクション2009作品。

Kachiwari Ring / Pierce
Kachiwari Ring / Pierce

リング：Silver925・水晶　ピアス：K18YG・水晶・パール
リング：32H×18.5D×18W　ピアス：10H×16D×17W（mm）

細かく割られた天然水晶の形を活かした、水晶の素材そのものを楽しめるリングとピアス。

Youichi Fukasawa

深澤　陽一

一級宝石研磨士（厚生労働省認定）
宝石加工・ジュエリーマスター（山梨県認定）
甲州水晶貴石細工伝統工芸士
やまなしの名工（山梨県知事表彰）
山梨県立宝石美術専門学校非常勤講師
山脇美術専門学校・日本宝飾クラフト学院非常勤講師

ジュエリー クラフト フカサワ
山梨県甲府市青葉町15－23
Tel:055-232-1214

キノコ
Kinoko

メノウ
12W×12D×14H（mm）

カワイイだけでなく、傘の下のひだや柄の部分までリアルさを追求した、こだわりのキノコ。

Koo Fu 09016
Koo Fu 09016

Koo-fu Pt950・silver925・水晶
100W×400D×20H（mm）

水晶への光の反射と景色の映り込みの面白さを意識して作ったペンダント。Koo-fuコレクション2009作品。

甲州貴石切子（ルース）
Koshukisekikiriko

表面にカットを施し、底面に切子細工を施したルース。カットと細工はそれぞれ5種類あり、その組合せは自由に選べ、様々な表情が楽しめる。デザインを元に宝石をカットするのではなく、「甲州貴石切子」を使うためのデザインを描くという、宝石にこれまでとは異なる付加価値を生み出した。平成29年6月に商標登録される。

Toshihiko Fukasawa
深澤　利彦

宝飾加工職人
現代の名工（厚生労働大臣表彰）
やまなしの名工（山梨県知事表彰）
伝統工芸技能者（山梨県知事表彰）

銜工房 深澤
山梨県甲府市東光寺2-31-3
Tel:055-237-0258

ブローチ
brooch

（上）K18YG・アメジスト・ピンクトルマリン
（下）K18YG・グリーントルマリン・カラーサファイア

（上）40W×60D×7H（mm）
（下）40W×20D×7H（mm）

デザイナーの要求に応えるために始めた、天然の葉のキャスト（鋳物の原型）作り。「うちでできない」とは絶対言いたくない。納得のいくキャストが作れるまでに3年もの月日を要した。その活き活きとした葉のモチーフに魅せられ、多くのデザイナーが約30パターンもある彼の葉を使ったデザインを描き、数々の作品が生み出された。

リング
Ring

プラチナ・K18YG・オパール
12号（サイズ）

昭和40年後半に奥様のために心を込めて制作したオリジナルリング。

天狗の葉団扇と紫水晶
A Tengu's Fan and Amethysts

K18YG・ピンクアメジスト・ダイヤモンド
75W×50D×7H（mm）

当館所蔵の代表作品の1つ。制作過程を館内にて映像で紹介している。
（デザイン：関戸　和代、研磨：清水　幸雄）

Ichiro Iino
飯野　一朗

彫金家
山梨県ジュエリーミュージアム館長
山梨県立宝石美術専門学校校長
東京藝術大学名誉教授
ドイツ インターナショナル ジュエリーアート協会会員

アリアリ
Ariari

シルバー・金メッキ
40～45W×20～25D×20H（mm）

1973年の東京藝術大学卒業制作でサロン・ド・プランタン賞受賞作品。以来多くのアリを作り続け、代表作品の1つとなる。わずか体長約2.5cmほどの作品ながら、胴体のおうとつや傾きだけでなく足も関節ごとに太さを変えるなど、細部まで忠実に再現され、1匹たりとも同じ形のアリは存在しない。なおかつ、1匹で11カ所以上のロウ付け作業を必要とするなど、卓越した彫金技術を持つ館長ならではの逸品。

ブローチ（ポケット）
brooch [pocket]

シルバー
70W×10D×85H（mm）

ポケットを彫金で表現するという大変ユニークな作品。布の質感をシルバーで見事に再現している。1975年日本ジュエリー展大賞受賞作品。

ブローチ
brooch

銅・ニッケル・四分一・赤銅・銀・K20
25W×10～15D×80～96H（mm）

日本独特の金属である四分一や赤銅などの煮色着色で生まれる、それぞれの色合いを楽しめる作品。

表現するマインドとそれを可能にする環境

神野 真吾（じんの しんご）

千葉大学准教授
山梨ジュエリーミュージアム・アドバイザー

「技術があるから作れるんだよ。」「作りたいものがあるから技術が必要になるんだよ。」この二つのセリフをどう考えるかに、21世紀のものづくりの重要なカギが隠れていると思います。日本のものづくりは、長く前者の考えを重視してきました。①良質な材料があり(原材料)、②デザインする力があり（デザイン）、③それを上手に加工することが出来（製造技術）、④低廉な価格に抑える（価格）ことで製品は売れます。多くのものづくりにおいて、日本では②を先進諸国の（市場の）趣味嗜好に合わせ（真似て）、③を人の能力あるいは機械化により発展させ、そして④を実現してきました。「技術があるから作れる」というのは③を絶対視する意識の表れです。

しかし21世紀では、製造技術の高度な情報化、機械化により、③はすぐに移転可能なものになりつつあります。テレビ、繊維、服飾、車、全てにあてはまります。そして④を可能にする安い人件費の点では日本は勝負することができません。つまり、「成熟した日本」で必要なのは、すでに求められているものを効率よくうまく安く作ることではなく、今は存在しない新しい価値を生み出すこと、つまり②を深めたものづくりということになります。新しい価値を生み出すことで、その価値自体にお金を払ってもらうようにならなければならないのです。

左から、大寄 智彦さん、深澤 陽一さん、深澤 利彦さん、飯野 一朗館長

そのために必要なのは「創造性」だと考えられます。創造というのは、すでにあるものを高品質、高効率に再生産することではもちろんなく、今現在存在しないものを「新たに」生み出すことです。そこで重要なのは、自分が「欲しい！」とか「こんなのあったらいいな！」と思うものを形にしようとする態度です。つまり「自分」を出発点とした表現への欲求を持つことだと言えるでしょう。もちろんそこにはリスクが伴います。すべての表現が多くの人の支持を受けるとは限らないからです。しかし一方で、多くの人たちが望むものへと無難に流れて行っても、そうしたものはすでに形になっていたり、多くの人が取り組んでいたりするので、オンリーワンとなるチャンスはほとんどありません。

おそらく今求められているのは、リスクがあっても、自分が実現したいことに挑戦できるマインドを持ち、リスクを取ることが可能な環境があることです。もちろん、リスクは少ないに越したことはありません。無難へと逃げず、成功する確率を増すためには、まずは自分を肥やすことが重要になるでしょう。様々な表現に触れ、他の領域の様々な価値を知ることが、時代の流れ＝トレンドを直感的に予測する力へとつながり、結果的に新しい価値を生む可能性を高めるのだと思います。

山梨のジュエリー業界には「技術」はあります。今求められているのは、それを活かして「作りたいもの」に挑戦できる環境を整備することではないかと思います。

From Yamanashi to the world
― 山梨から世界へ ―

大寄 智彦（おおより ともひこ）

2014年に甲府市内にオープンした、ショップ アンド スタジオ「TO LABO」を拠点に、国内外へ活動の場を広げている大寄さんに話をうかがいました。

トークイベントの中で、大寄さんがKoo-fuプロジェクトやY-Project（※1）に参加したことについてのお話がありました。

普段は裏方の職人が、大きな会社の方々と一緒に参加させていただけたということだけでも、大変勉強になりました。また、第一線で活躍されている方々と話ができたり、パリへの出展など、1人では出来ないことを経験させてもらえたことは、大変有意義でした。

実際、当初は自分の技術が誰かの作品に使ってもらえたら、という思いで参加させてもらっていたのですが、深澤直人さん（※2）のおかげで、思いがけず自分が表現したいものを自分の技術で作る機会を得ることができました。

参加するまでは自分のコレクションを発表したり、ブランドを創ったりということを全く考えていなかった僕にとって、本当に大きな転換点となりました。

Koo-fuプロジェクトへの参加も1つのきっかけとなり、自身のブランド「TO LABO」も立ち上げました。

自分のブランドを創ったことにより、こちらから外への発信がしやすくなりました。

それまではOEM（他社で販売される商品を製作すること）が主流でした。ですので、仕事が依頼されるのを待っているのが普通で、もしその発注が無くなってしまったらという不安感が常々ありました。

ブランドの商品のことだけでなく、いろいろな情報を絶えず発信することで、人や会社との新しい出会いにつながり、仕事の内容も僕自身の世界も大きく広がりました。

また、僕が発信することで、少しでも山梨を知ってもらい、山梨の宝飾産業に興味を持ってもらうきっかけになってもらえたらという思いもあります。

県内外の展示会や講演会、デパートなどでの期間限定ショップに、積極的にご自身が行かれているのにも理由があるのですか。

山梨の研磨や彫刻の技術で生み出された石の魅力は、現場の店員さんや完成したジュエリーだけでは伝えきれない部分があります。それに山梨から発信しに来たってことも言いたいので、やはり自分で行って僕自身の言葉で伝えることに大きな意味があると考えています。

また、デパート等での販売では、一般のエンドユーザーさんに商品についてダイレクトに語れますし、それに加えて山梨の魅力も伝えられます。そうすることで、その人にTO LABOの商品をまた欲しいと思ってもらえたとき、ショップのある山梨へきてもらうきっかけにもつながります。

また、エンドユーザーさんとの直接のコミュニケーションが、僕自身の制作活動にも大変大きな刺激を与えてくれています。

国内だけでなく、海外へも目を向けられています。平成30年3月までに3回、国際協力機構（JICA）を通じてザンビアへ行かれました。

ザンビアはエメラルドの産地ですが、エメラルド以外の天然石は宝石として扱われていないのが現状です。現地の人たちが加工技術を修得し加工品販売を仕事とするようになれば、現地でそれらの石の価値が理解され、その採掘技術も格段に向上するでしょう。そうすれば、僕らも良質な石の購入ができるようになるはずです。将来的にはそこまでの流れが出来たらと考えています。

更に、海外での流通販売経路や方法も指導していくことで、ザンビアの経済の安定にもつなげていければと考えています。

それで現地の人へ加工技術の指導を。

はい。ただそれは単なる技術の移転ではなく、技術を介した山梨の技術やジュエリーの発信の絶好の機会だととらえています。

アフリカと日本では明らかに商圏が異なるので、異なる商圏でザンビアの加工技術やその商品が評判になれば、その技術の出所はどこだ？という話になっていく。その時に、日本の、山梨の技術を学んだということがわかれば、おのずと山梨の宝飾産業に注目が集まると考えています。

大寄さんの日々の活動は、常に「山梨」を意識されたものだということが、お話から伝わってきます。

僕自身の原点はやはり山梨だし、これからもずっと“Made by 山梨の技術”にこだわって、もの作りをしていきたいです。かつて水晶が産出されたことをきっかけに宝飾産業が盛んになった山梨で、水晶彫刻を家業としている『貴石彫刻オオヨリ』に生まれた僕だからこそ、伝統工芸の技術も用いて加工した、自分らしい水晶を中心としたジュエリーを作り続けられるはずだと考えています。

そしてそれが、これからの山梨の宝飾産業の発展の一端を担うことにつながっていけば、幸いだと思います。

ありがとうございました。

自身のブランドを立ち上げ、国内外での多くの出逢いから刺激を受けながら、自身の彫刻・研磨技術を使った作品でジュエリーとしての水晶の新しい魅力を伝える大寄さん。

ジュエリー産地山梨の更なる発展への熱い思いを抱いた彼の、今後の活動から目が離せません。

宝石美術専門学校とミュージアムへの期待

宝美の授業で各分野の第一線で活躍している人の話を聞く機会があれば、自分が描いている夢を現実的に考えられるようになると思うし、将来のことが思い描きやすくなるんじゃないかなと思います。

ミュージアムでは、もっと一般の方のメリットになるようなことを増やしていけることができたらいいんじゃないかって思います。例えばジュエリーのリフォームやオーダーができる場の提供とか。そうなったら僕も協力します！

※1　共にジュエリー産地「山梨」の活性化プロジェクト。

※2　山梨出身のプロダクトデザイナー。Koo-fuプロジェクトの初代デザインアドバイザー。

想いを形にするために

深澤 陽一（ふかさわ よういち）

2016年に発表された『甲州貴石切子』を、「現代の名工」である清水幸雄さん（株式会社シミズ貴石）と協働制作していることでも注目を浴びる深澤陽一さんに、その思いを語っていただきました。

「甲州貴石切子」は、とても新鮮で綺麗なものですね！発想はどこから？

表向きは発表する１年くらい前から考えていたって言っているけどね（笑）。実際は、こういうものを作りたいって思ったのは20代さ。でも、当時はそれを形にする技術が自分にはなかった。どうすれば作れるかっていう理屈まではわかっていたけど、現状まで精度を上げたものはできなかった。そう簡単に真似できないところまで自分に技量を付けて、やっと納得がいくものが作れるようになったから発売できたんだ。

昨年度（平成29年度）商標登録されましたね。

商標登録はできないと思っていたんだよね。でも、できるかできないかを確認する意味もあって、試しに出願したんだよね。そしたら登録できちゃった。

それまでは、中間業者が関わる過程で、僕らが作ったものかどうかが分からなくなっちゃうことだってあった。だから、商標登録され、エンドユーザーには僕と清水さんが保証してるものだけを「甲州貴石切子」として安心して購入してもらえるようになったよね。

特許取得は考えなかったのですか。

特許取得も勧められたけどね、僕らは取らない。

極端なことを言えば、「甲州貴石切子」と言わなければ同じものを作ったっていいわけさ。だけど、そんなことをしようなんていう職人は、山梨にはいないよ。みんなプライド持って仕事してるからね。

今僕らが作っているものと同じ水準のものが作れて、一緒に「甲州貴石切子」としてやっていきたいってことであれば、更に山梨の地場産業として盛り上げていけると思うから大歓迎だよ。

実際のところ、生産が追いついていないんだよね。２人だけだと、できあがる量に限界はある。そこがこれからの課題。

カットも細工もご自身で出来るのに、何故お二人ですることに？

自分１人で全部やると時間がかかってしまって、工賃の部分で切子１つの単価が高くなっちゃう。僕より上手くて僕より時間がかからずに作業ができる人と組めば、１人でやるより綺麗で良いものが安く提供できる。

僕が考えたんだから全部１人でやって、高い単価で提供するのもありだけど、そうしたらその値段で買える人の手にしか渡らないわけよ。だけど、価格帯が広がれば広がるほど、購入できる層も広がる。商売という意味では絶対そうすべきでしょ。おまけに、作業分担してやれば作れる石の数も増やすこともできる。

結局は買う側のニーズに応えるのが１番大事で、こっちの理屈を押しつけたってダメ。買ってもらえなければ商売にはならないからね。高すぎて買ってもらえなければ、単に技術を自慢してるだけになるじゃん。でも僕はあくまでも職人として仕事しているわけだから、流通しやすいものにしていかなければいけないんだ。

まさに、神野さんがトークイベントで言っていたことだよね。作りたいものがあるから、必要な技術を使う、僕の場合はそれが清水さんの技術だったってことだよ。

宝石に「甲州貴石切子」という付加価値をつけたことによる、１番の違いは何ですか？

今までのジュエリーって宝石の種類やデザインがメインであって、研磨加工技術はそれを形にするためのものでしかなかったんだ。

だけど、「甲州貴石切子」の場合は違う。加工技術というか、技術が可能にしたその見た目の斬新さがメインなんだ。そうなると、「甲州貴石切子」を使いたくて「甲州貴石切子」が活かせるデザインを考えてくれるようになる。石の仕上げの形とかサイズとかなら、僕らも多少のオーダーにも応えられるしね。

そして、僕らの「甲州貴石切子」を使っているってことを売りにして、市場へ送り出してもらえる。この順序は今までじゃ考えられない。だからこそ、デザイナーや購入者といったユーザーのニーズには応えようって思うよね。

ありがとうございました。

長年頭の中で温めていたものを、見事に形にした陽一さん。飄々とした風貌に隠された、真正面から真摯に自分の技術に向き合っている姿勢が印象的でした。その技術で次は何が生まれるのか、想像すると心が躍ります。

宝石美術専門学校とミュージアムへの期待

新館長（校長）がお見えになったことで、外の世界とつながる機会が増えると思うから、生徒も刺激になるよね。

ミュージアムは平日も実演が見られるようにするといい。１日３時間でも良いからさ。時間をかけて一からジュエリーを作る体験なんかもあると、更に興味を持ってもらえるんじゃないかな。

ニーズに応えられる技術と情熱の継承

深澤 利彦（ふかさわ としひこ）

山梨の宝飾加工職人の重鎮の１人である深澤利彦さんに、その優しい目の奥で光る鋭い眼光で見続けてきた、山梨の宝飾産業の今までとこれからをうかがいました。

ミュージアムの開館当時から、ずっと実演（※1）に来ていただいています。

ミュージアムでずっと実演しているのは、お客さんのため。僕たちが若い頃は、職人は前に出るなって時代だったからね。人前で実演なんて考えられなかった。そういう意味でもミュージアムを作ってもらえて良かったと思うよ。

お客さんの前でどうやって作るかを見せることで、お客さんの見方が違ってきていると思う。どうやって作るのかってことや、どうして手作りがこんなに値が張るのかってことを、実際の工程を見れば理解できるし、お客さん自身も納得して買えると思う。

トークイベントでは、手作り品を修理できる職人さんがいなくなってしまうことを憂いていらっしゃいました。

今も修理や磨き直しの作品をいくつか預かっているよ。20～25年くらい前に作ったやつ。洗ったって減らないんだから、ちゃんと手入れをすればずっと綺麗に使える。でも、洗い方を間違えるといっぺんに価値を失ってしまうことだってある。

ジュエリーを作るだけでなく、作ったものをちゃんとメンテナンスできるような技術を持った職人を育てることも、僕たちの仕事だと思っているよ。

技術を受け継ぐ者の育成ですね。

昔から僕は技術をオープンにしているよ。同時に何人も育成できるように、工房にもたくさん机が置いてある。

昔は何人も雇ったり外部で教えたりして、2，30人くらい面倒をみたかな。将来独立することを優先して教えていたよ。独立後今でもこの仕事を続けてやっているのは5人くらいかな。

最近は、宝美（山梨県立宝石美術専門学校）の生徒が何人か教わりにやってきている。

授業と違って、作ったものだけが成果じゃないからね。2時間かけて良いものが1つ作れたって、何の意味も無いことが多いのがこの仕事。それを5分10分で作れて、初めて商売になる。そういうのは学校じゃ学ばないから。

今年（2018年）の夏には宝美で課外講座「輝きの伝承講座」（※2）も行いました。

普段の授業とは違って、希望者だけが受講したから生徒の目の色が違ってた。生徒たちも普段の授業とは違う実践的なやり方を教わることで、技術の修得だけでなく、卒業後の実際の仕事のことや自分が向く仕事がどれかとか、考える良い機会にもなったんじゃないかな。

学校だけでなく、山梨の職人たちがみんなで新しい人材を育てていかないと、技術の伝承がストップしちゃうよ。

深澤さんは、技術について若い頃からとても研究熱心だったとうかがいました。

その時代時代でね、流行り廃りもあって、求められることが違っていた。金属がピカピカに光ってるだけじゃ嫌だっていう時代もあってね、何かテクスチャ（表面の質感）が与えられないかってデザイナーに言われて、自分で考えて模様を開発したこともあった。

特別な技術じゃなきゃできない場合もあるけれど、誰にでもできる技術でできることだってある。自分の持っている技術を使って、いかにしてデザイナーの要求を表現できるかっていうことが、とっても大事なんだ。

今はCAD（コンピュータを使ってデザインをすること）で制作した、石を並べただけのデザインとかが増えてきているから、テクスチャを使ったものとか減ってきているけど、だからこそ機械作りでは出せない、手作りならではっていうものの強みが逆に見えてくるよね。

どっちが良いか悪いかじゃない。お客さんの好み次第なんだよ。機械作りは最初の出来は綺麗なんだけど、ずっと付けていると飽きてくるっていうお客さんもいる。同じ直線であっても、機械を使わないで手で引いた直線から生まれる味を好んでくれるお客さんがいるうちは、それに応えられる技術が必要だし、その技術を使える職人を絶やさないことが大事なんだと思うよ。

ありがとうございました。

ご自身の制品作りと山梨の職人技術の伝承に、70歳を超えているとは思えない程の情熱を注いでいる利彦さん。その技術と熱い思いを引き継ぐ職人が大勢育っていくことが、山梨の未来を切り開いていくに違いありません。

宝石美術専門学校とミュージアムへの期待

「輝きの伝承講座」は続けて欲しいね。やる気のある生徒はどんどん伸ばしてあげたい。実践的なことをどんどん教えていけば、就職したときに本人も会社も助かるよ。

ミュージアムは新しい館蔵品、それも手作りのジュエリーが増えたらいいよね。ダイヤが多いねとかじゃなくて、デザインと技術で「すごいな！」って思わせるものをね。

そして、ミュージアムでジュエリーがオーダーできるようになったらいいね。

※1　ミュージアム実演工房において、土日祝日に山梨の職人が交代で実演を行っている。

※2　宝美の夏期休業中に同校学生を対象に「やまなしの名工」に選ばれた職人を講師に招いて行われた課外講座。

こだわりが生む
山梨の未来

飯野　一朗（いいの いちろう）

山梨ジュエリーミュージアムは今年（2018年）4月に新しく彫金家　飯野一朗氏を館長に迎えました。

飯野館長は、東京藝術大学で40年間学生の指導を行いながら、館長自身もクラフトやジュエリー、オブジェに至るまで幅広い分野で、常に新しい視点と卓越した技術によりユニークかつ風格のある作品を数多く生み出し続けています。

第一線で活躍されている飯野館長に、トークイベントを通じて知った山梨の職人の活躍や宝飾産業、これからのミュージアムの展望などについて語ってもらいました。

山梨の職人さんたちの活躍をうかがっていかがでしたか。

深澤利彦さんの場合は、どんなオーダーにでも応えられなければ職人ではないという時代の中で、長年ご自分の技術を磨き、その時代時代のニーズに応えてこられました。応えることにこだわりと自負を持って、仕事をされていらっしゃったのではないかと、拝察いたします。

「現代の名工」（厚生労働省が表彰する卓越した技能者の通称。深澤利彦さんは今年度受賞）に選ばれるほど自らの仕事を極めるには、相応のこだわりがないとできないことなので、長年大変な努力を重ねてこられたのではないでしょうか。

深澤陽一さんと大寄智彦さんは、自分らしい、自分ならではのものを作るんだというこだわりがあって、仕事も選んでらっしゃるようにお見受けします。

陽一さんの「甲州貴石切子」、「切子」というと、その言葉から和なイメージがありますが、ドイツでも以前から同じような技法が使われていました。切子自体は国内外で昔からあったものだけれど、表にカットを、裏に切子細工を宝石に施すという、これまでに誰もしてこなかったことをされた、そのことに大変大きな意味があるのです。

よくこれほどまで精度の高いものを作ってらっしゃるなと感心いたしました。しかも、甲州貴石切子づくりを徹底してやってらっしゃる。徹底的にやってやり抜くことで、周りも認めざるを得なくなりますし、結局はご自身の得になるんです。やはり商売で生き抜くためには、そこまでとことんやらないと。

大寄さんも新しいチャレンジをしながら、自分のカラーになるようなものを、こだわりをもって作ってらっしゃいますね。彼の工房やショップにも行かせていただいて、それが強く伝わってきました。

トークイベントで過去の作品の画像を拝見して、去年（2017年）のJJAの日本ジュエリー大賞のカットは大寄さんが制作されたものだということが、すぐに分かりました。これも僕の作品や陽一さんたちの「甲州貴石切子」と同じです。これぞ大寄智彦の作品っていうところまで、とことん追求して仕事をされていて大変素晴らしいと思います。

こだわりを持ちすぎて意固地になってしまうと、視野や活動範囲を狭めてしまい、その人の世界が小さくなってしまいます。ですが、そうならなければ、自分の仕事や技術に対しこだわりを持つことは大変良いことだと思います。

山梨の宝飾産業のこれからについて、どう思われますか。

業界全体で、海外も視野に入れて山梨の宝飾産業について情報発信していかれるといいのではないかと思います。山梨の技術の高さ、貴金属加工の緻密さ、カットの精密さは世界に誇るべきレベルであるからこそ、それを上手に伝えていく必要性を感じます。

どこで作っても同じじゃないんだよ、山梨にはこんな技量を持った職人がいるんだよってことを、企業がバックアップして世界に発信することで、世界的なオファーが山梨に来るようになることを期待しています。

また、地金にしても石にしても、特許を取るくらいの独特なものをクリエイトしていっていただきたいと思います。山梨にある技術を、どうやってそういう特別なものに結びつけていけるかを、職人の皆様1人1人で、そして業界全体で考えていっていただくことが、山梨の宝飾産業の新たな発展に結びつくのではないでしょうか。

そのための宝美とミュージアムの役割は何だと思われますか。

県立の専門学校ということもあり、県内企業に密接した即戦力育成の学校とみられがちですが、やはりこれからは県外や世界でも活躍できる能力をもった学生、山梨に就職しても海外を視野に入れた取り組みができるようなグローバルな目線を持った学生の育成にも、力を入れていきたいと考えています。

また、ミュージアムは山梨の宝飾産業の情報発信のための有効な手段の1つを担っています。山梨ジュエリーの魅力をこれまで以上に伝えるために、山梨の貴金属制作の歴史などを常設展示とし、そこに展示するのにふさわしい山梨の技術が詰まったジュエリーを、各企業から寄贈いただけたら大変素晴らしいと考えています。商品のままだと売れてしまいますが、寄贈していただくことで後世に残すことができ、そのことは山梨の職人の卓越した技術を代々受け継いでいくためにも、大変意味のあることだと思います。

また、そのためには、ミュージアムに寄贈すること、ミュージアムに展示することがステータスとなるくらいにミュージアムを魅力的な存在にしていかなければいけないと考えています。企画展示に合った作品を県内企業がこぞって制作し、その発表の場としたくなるような企画を考えていきたいと思います。

これからも山梨ジュエリーミュージアム、県立宝石美術専門学校をよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。